

第 109 回 ごみ収集パイプライン利用者の会 議事録

日時	2026年9月24日 19:30～20:35
場所	芦屋浜 センタービル3F 会議室
参加者(敬称略)	長尾・大山(アステム D 棟)、友田・下木(アステム C 棟)、森(芦屋浜第1住宅)、梅谷(浜風町1街区)、保田(浜風町第4住宅)、北中(浜風町第5住宅)、谷野・末友(新浜町住宅)、三浦・池西・小谷(ラ・ヴェール芦屋Ⅱ)、松木(ラ・ヴェール芦屋Ⅲ)、山口(アステム A・B 棟)、中村(芦屋浜第 2 住宅)、小林(緑第西区)、池田(緑第二住宅)、向井(潮見第二住宅)、春木(南浜 1 街区)、寺前(市議)、川島(市議) 合計21名
議題	1. パイプライン停止状況の説明 2. 実証実験(モニター)の実施状況報告 ・高層住宅 ・中層住宅 ・タウンハウス ・戸建住宅 実施により明らかになった課題等 3. 生ごみ減量ワークショップ ・家庭でできる生ごみ減量の工夫 ・参加者による意見交換

議題 1 パイプラインの停止状況について

【説明】

現在のパイプラインの運転状況について報告があった。南芦屋浜地区については大きな問題は発生していないが、芦屋浜地区では複数の投入口が停止している。

浜風町および潮見町では、雨水の流入が原因となってパイプラインが停止している。また、高浜町の一部では、管内にごみが堆積し、通常の吸引では除去できない状態となっているため、高圧洗浄による対応が進められている。一方、若葉町や緑町などの一部については、故障ではなく代替収集の実証実験を行うため意図的にパイプラインを停止している。

従来、管内に堆積したごみについては人が管内に入って除去する場合もあったが、安全上の問題から現在はそのような危険な作業を避け、高圧洗浄等による除去を行っている。このため、復旧に時間と費用を要する場合があることも説明された。

また、停止状況については、市から停止箇所や原因等の報告を受け、利用者へ情報提供している。今後も、停止時の情報を迅速かつ継続的に共有していくことの重要性が確認された。

【Q&A】

Q:停止しているパイプラインはいつ復旧するのか。

A:復旧時期を現段階で明確に示すことは難しい。特に管内のごみ堆積については、安全面

から人が管内に入って除去する方法を採らず、高圧洗浄等によって対応しているため、復旧まで時間を要する場合がある。

Q:雨による停止について、今後も同様の問題が起こる可能性はあるのか。

A:施設の老朽化に伴い、管路等から雨水が流入する問題が発生している。市もその都度補修等を行っているが、今後も大雨時には注意が必要である旨の説明があった。

【結論】

パイプライン停止には、雨水流入、管内のごみ堆積、実証実験に伴う計画停止など、異なる原因がある。利用者が混乱しないよう、「どこが停止しているのか」「原因は何か」「臨時収集はどうするのか」「復旧状況はどうなっているのか」を分かりやすく継続して周知することが重要である。

議題 2 パイプライン代替収集の実証実験について

2-1 戸建住宅・金属ボックス方式

【説明】

戸建住宅では、金属製ごみボックスを使用した実証実験が行われている。

第1弾のステンレス製ボックスについては、ふたが軽く、高齢者を含めて開閉しやすいこと、ふたを閉めていれば臭いがほとんど外に漏れないこと、カラス被害を防止できることなどが確認された。

一方、日光の反射が強く、車の運転時にまぶしいとの意見や、夏季には金属表面が熱くなること、ボックス内部に虫が発生すること、排水構造がなく水洗いによる清掃が難しいことなどが課題として挙げられた。

第2弾では、クリーム色に塗装した金属ボックスの内部にごみカートを収納する方式が採用された。投入口は2か所あり、扉を押すことで簡単に投入できる。収集時には内部のカートを取り出して収集車へ移すことができ、道路から多少離れた場所でも対応しやすいことが確認された。

第1弾と比較すると、光の反射、収集作業、清掃のしやすさなどの面で改善がみられた。一方、清掃時の鍵の管理など、今後検討すべき事項も残っている。貼り付けたテキスト(1)

【Q&A】

戸建住宅については、会議中に大きな質疑はなく、実証実験の途中経過として問題点と改善点が共有された。

【結論】

第1弾では実際に使用することで、光の反射、表面温度、虫、清掃などの問題が明らかになった。第2弾ではこれらの一部が改善されており、実証実験によって問題を発見し、次の方式へ改善していくこと自体に大きな意味があることが確認された。

2-2 高層住宅におけるごみカート方式

【説明】

高層住宅では複数のごみカートを設置し、24 時間ごみを出せる方式を実証している。ごみ量の多い週末から月曜日にかけては多くのカートが満杯になるものの、ごみの大きな散乱やカラス被害は確認されず、収集作業も比較的短時間で終わっている。24 時間いつでもごみを出せる利便性については評価する声があった。

一方、第 1 弾では、カートを目隠しするためのルーバーとカートのふたが干渉し、ふたが開けにくい問題が発生した。また、カート同士を密接して並べたことにより、隣接するふたが干渉する問題も確認された。

第 2 弾の金網で囲う方式についても、出入口が 1 か所しかないため手前のカートにごみが集中すること、強風時にカートのふたが飛ばされる危険性、扉の閉め方が分かりにくいこと、景観上の問題などが確認された。

【Q&A】

Q:現在実施している方式以外の方法についても、今後実証する予定はあるのか。

A:これまで検討してきた複数の方式について、第 1 弾、第 2 弾、第 3 弾と順次実証している。ただし、当初の協議内容と実際の設備に違いがある部分もあり、改善すべき点があるとの説明があった。貼り付けたテキスト(1)

【結論】

ごみカートそのものには一定の有効性が確認されている一方、カートの配置、投入口・扉の位置、強風対策、景観、満杯状況の分かりやすさなど、周辺設備を含めた設計に課題がある。

設備単体を評価するのではなく、「住民がごみを出す→保管する→収集する→清掃する」という一連の流れで評価する必要がある。

2-3 タウンハウスでの実証実験

【説明】

タウンハウスでも既存のごみ置場を利用した代替収集方式の実証が進められている。

実際に運用した結果、週末から月曜日までのごみ量が想定以上となるなど、従来の収集頻度との違いによる課題も確認された。

【Q&A】

タウンハウスについては、録音上、明確な質疑応答として整理できる発言は確認できなかった。

【結論】

実証実験はまだ途中段階であり、今後のごみ量、必要な容器数、収集頻度、住民の使いやすさ、管理方法等について検証を継続する。次回の利用者の会でも、その後の状況を報告することとなった。

議題 3 生ごみ減量ワークショップ

【説明】

燃やすごみの減量を考えるため、生ごみをテーマとしたワークショップを実施した。

資料として京都市のごみ組成データなどが紹介され、生ごみには多くの水分が含まれていることから、家庭で生ごみそのものを減らすことに加え、水分を減らして排出することの重要性が説明された。参加者は 2～3 人程度のグループに分かれ、

「現在、生ごみを減らすために行っていること」

「今後、こんなことをすればよいと思うこと」

を付箋に記入し、意見を出し合った。

出された意見を整理すると、主として「購入」「保存」「食べ方」「水分を減らす」「処理・資源化」「捨て方」という視点に分類された。具体的には、食材を買い過ぎない、冷蔵庫を整理して食品を腐らせない、野菜の皮などもできるだけ食べる、生ごみの水分をよく絞る、生ごみ処理機を利用する、肥料化するなど、日常生活の中で実践できるさまざまなアイデアが出された。

さらに、生ごみを家庭だけで処理するのではなく、スーパー等を回収拠点として資源化する方法や、生ごみを分別回収してバイオガス化・肥料化する考え方についても意見が出された。一方、回収・処理費用を誰が負担するのか、生成した肥料等をどこで利用するのかといった課題も指摘された。

【Q&A・意見交換】

Q:家庭だけでなく、スーパーなどで生ごみを回収し、資源化することはできないか。

A:考え方として有効であり、実際に事業系食品残渣を飼料等に利用する事例もあるとの意見があった。一方、家庭系生ごみを回収する場合には、回収方法、処理施設、費用負担などを併せて検討する必要がある。

意見:生ごみを分別収集し、バイオガスや肥料として利用する方法も考えられる。

これに対し、資源化した後の利用先、特に肥料の需要先を確保することが重要であり、地域条件によって導入可能性が異なるとの意見が出された。

【結論】

短時間のワークショップであったが、参加者から多くの具体的な意見が出された。

今回の意見は、

買い過ぎない → 保存を工夫する → 食材を使い切る → 水分を減らす → 家庭で処理する → 地域で資源化する

という、生ごみ減量の一連の流れとして整理できる。

今回は「現在行っていること」「今後考えられること」を出し合う段階とし、具体的な行動計画については、今回の結果を整理したうえで次の段階として検討していく。

全体まとめ

第 109 回では、現在のパイプライン停止状況を共有するとともに、代替収集実証実験について、実際に使って初めて分かった問題点が多数報告された。特に代替収集については、

容器そのものだけでなく、配置、景観、強風対策、清掃、収集作業、住民の使いやすさまで含めて評価する必要性が明らかになった。

また、生ごみ減量ワークショップでは、参加者自身の生活経験から多数のアイデアが出され、今後の具体的な行動につなげるための基礎となる意見を収集することができた。